「日本の文化と繊維」

歌舞伎衣裳に使われた『新合織』

佐々木 久 衛

1. 歌舞伎は庶民の芸能

日本の代表的な伝統芸能の一つである歌舞伎衣裳は、その優雅さと重厚感の表現から、これまで、素材はすべてと言ってよいほど正絹に限られてきた。1992年、折しも『新合織』が着実に、その地位を確立し、一般消費者にも認知されつつある頃、正絹に代って、ポリエステル『新合織』が初めて歌舞伎衣裳と象徴的な出会いを果たしたのである。

歌舞伎は日本の伝統的芸能で一見して高貴な芸術のように錯覚するが、その発祥は、あくまで庶民の身近な娯楽であった。文字どおりの歌と舞と伎（わざ）ではなく、「傾き」が語源で常人とは違った風体・行為をすることの意から来たと言われる。合理的で庶民的な素材である「合織」が庶民的芸能であった歌舞伎衣裳に用いられたことに因縁を感じるのである。

2. きっかけは食事中的の会話

『新合織』と歌舞伎衣裳と出会いは、さらに、その二年前の1990年に遡る。

三代目中村鴈治郎襲名披露の後、鴈治郎ご夫妻と前田勝之助東レ社長が食事をされた時、古典歌舞伎衣裳に『新合織』をとの話しがでたことがきっかけと言われる。

それまで、1986年に行われた市川猿之助のスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」に、東レ“シルック”（絹調ポリエステル）が合織として初めて歌舞伎衣裳に採用されている。また、この歌舞伎衣裳に『新合織』の話しがでたこの年に、能衣裳も東レ“シルック”を使って誕生していた。観世流能楽家の梅若万紀夫氏が率いる「梅若研能会」でこの衣裳が用いられ、南フランスでの公演、さらに、その後のイギリス公演など好評を博している。

しかし、『新合織』の範疇の素材が伝統衣裳に用いられたのは、この歌舞伎衣裳が初めてである。

この『新合織』歌舞伎衣裳は、伝統工芸に定評のある川島織物（京都市）で手掛けられた。刺繍などは、川島織物の指導により、中国の蘇州で施され、これだけでも一年に及ぶ細かな作業であった。

製作された衣裳は古典歌舞伎「娘道成寺」の衣裳三点と襦袢一点で、その出来映えは、図1のように、大変見事で「感覚的には絹そのもの」と評価が高い。『新合織』が伝統衣裳にふさわしい品位と風格を持ちうることが証明される結果となった。

図1 「娘道成寺」の『新合織』歌舞伎衣裳

"Shingosen" Used in Kabuki Play

著者紹介 HISAE SASAKI

Textile Development Center, Toray Industries, Inc.

東レ株式会社テキスタイル開発センター 主任部員

著者は、テキスタイル新商品開発に従事しておられる技術者である。「歌舞伎」も「新合織」も日本人の感性から生れた芸術と云う筆者の視点が読みどころである。

3. 使われた『新合織』

この古典歌舞伎衣裳に採用された『新合織』素材は、“シルック・シルデュー”と“シルック・ロイヤル”Sである。両者とも、東レの代表的な『ニューシルキー新合織』で、「より絹へ」から「絹を超える合織独自の質感」をコンセプトに設計・開発された素材である。

a. “シルック・シルデュー”

この素材は、従来の“シルック”の三角断面形状を受継ぎながら、潜在多段高収縮ポリマを用いて異収縮混織糸としている。発色性、光沢などの絹本来の質感を追求しながらも、絹を超越した先進的風合いとして、独自の「ふくらみ感・反発性・ドレープ性を表現し、上質のシルエット（仕立て映え）を狙った新合織である（図2参照）。

図2 “シルック・シルデュー”織物の拡大写真

b. “シルック・ロイヤル”S

この素材も、“シルック・シルデュー”の優れた「ふくらみ感」などの特徴を備えながら、従来の“シルック”の三角断面から、各頂点にサブミクロンの微細スリットを刻み込んだ花卉型断面としている。これにより、発色性がさらに高まると同時に、微妙な布布間の摩擦係数変化から、正絹の着物や帯で見られる優雅な「絹鳴

図3 “シルック・ロイヤル”Sの糸断面形状

り」や「衣ずれ」が表現でき、着崩れしにくいメリットもあると言われる東レの最高級ニューシルキー素材である（図3参照）。

4. 歌舞伎と『新合織』の相通じること

17世紀の民衆のエネルギーが原形となった、日本の伝統芸能「歌舞伎」に、21世紀のハイテク繊維技術『新合織』はいかにもミスマッチのように見える。しかし、『新合織』が、世界のどこからでもなく、この日本で生まれた純オリジナルな素材であることは、偶然ではなさそうな気がする。素材開発がこれだけ高度化する現状は、すでに、芸術である。とすれば、「歌舞伎」も『新合織』も日本人の感性から生れた芸術であることはあながち無関係ではなさそうである。

歌舞伎は、理屈をつけるのではなく、素直に皮膚感覚で、その美を感じとる芸術と言われている。若者がファッションを捕らえる目も、まさしく「理屈ではなく、皮膚感覚」である。

ファッションテキスタイル開発に従事している筆者は、技術者の端くれであるが、日常、つついり理屈っぽくなりがちである。大いに反省している。

（平成6年7月4日受理）